



蟋蟀 (こおろぎ)

北方①は実に愛すべきところだ。秋は暑くもなく寒くもなく、日差しはやわらかく美しい。いつも穏やかな風が吹き母親の手のように、寂しい心を静かになでてくれる！落葉が野や畑に舞い落ちて、大地が棕櫚(しゅろ)の皮のような黄土色に染まる。蟋蟀(こおろぎ)は軽快な魅力的な調子で歌い、すべてが厳かな光景に映る。この光景は私に一種特別の感情を与えてくれて、どこに行こうと私にとって北方の秋がいちばん素晴らしいように感じられる。

たぶん九歳ぐらいだったろうか。そのころから私は、憂いというものがどんなものであるかが分かりはじめた。子供たちの群れの中に私の姿はほとんど見られなかった。学校ではいつも本を手放さず、同級生と大声を上げて楽しくはしゃいで遊んだこともなかった。家に帰ると親戚の中にいるのはみんな幸せな子供たちで、彼らがいつも母親に甘えて寄り添っている姿を見るのが怖かった。自分に言い聞かせた。「母のいない子供は母のいる子供とはいっしょに遊ぶ必要なんかないのだ。けんかをすると彼らは母親のことを持ち出して威張りくさり、ふだんでも無意識におごり高ぶっているではないか。」

母方の上から二番目の叔父さんの娘、つまり五番目の従妹は、新しい服を着たときやキャンディーをもらったときにはいつも私に見せに来た。「ほら、お母さんがまた新しい服を作ってくれたの」とか、「おいしそうなキャンディーでしょう。お母さんが買ってくれたの」といった耳障りなことばを聞くと、楽しい気分でしたときでも涙がこぼれ落ちた。それで私は彼らを避けていろいろな場所にいき、一人遊びをするしかなかった。寂しい日々慣れると、みんなが集まっていて騒々しいのは苦手だと思えるようになった。(この性格は今日までずっと変わらない。)

しかしあるとき、私は面白い遊び友達を見つけた。かれは私の寂しさをいくぶんか取り払ってくれただけでなく、悲しい気持ちを慰めてくれた。かれは人ではない。話をすることは

できないけれど歌を歌うことができる、速く遅く、高い音、低い音で。昼間は速く高い調子で歌う。まるで私の周りを取り囲んでいる重苦しい空気を破り、勇敢に邁進せよと私を激励してくれるように。夜はゆっくりと低い調子で歌う、母に代わって私を夢の世界に導いてくれるように。

最初のころ、私はまだこの不思議な気持ちを抱えたまま、かれの住所、名前を問うことはなかった。だんだん我慢ができなくなって、ちょっとかれの顔を見たくなくなった。長いあいだ離れている友人に会いたいと思うのは当然の心理だ。そこで私は歌声の出所を追跡しようと決め、窓の前にある菊の花壇に行った。そっと石の鉢を横にずらすと六分(2cm弱)ぐらいの長さの黒い小さな生き物が見えた。頭の上には日本の長いひげがあって、二つの目が煌々と光り、尾には三分の長さの二本の粗い毛がついている。

あいさつの握手をしようとしたその瞬間、かれはあつというまに跳んで姿を消してしまった。私は驚きがっかりして一瞬声も出せずにいたが、ついに「わーん」という泣き声を上げた。唯一私を可愛がってくれた祖母が驚いて、いったいどういう目に遭ったのかと案じ、優しく問いただした。

「どうして泣いてるの？ またお父さんを怒らせたんじゃないのかい。お利口さんだから、ちゃんと話さない。おばあちゃんがお父さんを叱ってあげるから！」

このように聞かれたのでさらに悲しみが増し、祖母の胸に飛び込んで激しくなきじゃくりはじめた。そして最後にわけを話した。祖母はそれを聞くと嘔き出し、私の頭をなでながら言った。

「ばかな子だね！ 何事かと思ったら蟋蟀だったなんて。蟋蟀はとても勝ち気で闘志のある虫なんだよ。土の中で生きていて、捕えても長くは生きられない。昔おじいさんがいたときは蟋蟀を闘わせるのが好きで、よく二匹捕えて竹かごの中に入れて闘わせていた。どちらかが敗けるまでは双方とも譲らず闘いつづけて、最後に勝ったほうが大きな声で歌って、敗けたほうに威厳を示す。

それでおじいさんは最強の蟋蟀を選んで育て、友達と闘わせて遊んでいた。おじいさんはお前のお父さんによく教えていた。人間は蟋蟀の闘志を学ばなくてはならない、ってね。よく覚えておきなさい。蟋蟀と遊ぶならよく可愛がって傷つけたらだめよ。いいかい？」

一心に祖母の面白い話を聞いていると、さっきまでの悩みを忘れ、蟋蟀がさらに可愛くなり、ますます蟋蟀を捕まえたいと思うようになった。祖父の遺訓に従うためには、かれに接近して観察して学ばなければならない。そこで祖母に蟋蟀を捕まえて飼う方法を聞いた。まず、かれのための住まいを作らなければならない。竹筒にナイフで空気の通り道になるようないくつか隙間を開け、端には人口になる小さい穴を開けた。また顔料の銀朱を買ってきた。聞くところによるとこれを餌に混ぜると特に響く声で鳴くそうだ。

すべての準備が終わったあとかれの居場所を探しはじめた。ところが、かれは二日間も歌わずにいてどこにいるかもわからなかった。

私はまた寂しさと憂いの中に沈み込み、ときどき、かれのことでこんなに悩むなどという無駄なことをすべきではなかったと憂うつになった。自分を責め苦しみ、虫一匹の友達さえも得られないのだと、凄まじい孤独を感じていた。

それは中秋節の夜のことだった。祖母が栗やクルミ、ナツメなどの果実を父と継母に分けてから、にこにこしながらガラスの箱を取り出して私に渡し、笑いながら言った。

「ほら、見てごらん。おばあちゃんの心からの贈り物だよ！」

近づいてすぐにそれを見るやいなや、私は宝物を手に入れたかのように跳びあがった。何とそれは、私がずっと望んでいた蟋蟀だったのだ！

急いでその蟋蟀をかごに入れ、銀朱を餌の中に入れてかきまぜた。蟋蟀はいっこうに鳴かなかったが、夜になると高らかに歌いはじめた。私はうれしくて大切に蟋蟀の世話をした。かれもだんだんと落ち着いて暮らすようになった。昼間はかばんの中に入れて学校へいき、夜は枕もとに置いていっしょに眠った。祖母がこのようなことをしてくれたことに感謝し、こまやかに私を気遣い愛してくれているのがわかり、さらに心から感謝した。

何日かが過ぎ、我が友の闘志が、自分が手本とするような十分なものであるかどうかちょっと試してみようと、考えた。それでまた裏庭の花壇に行き積り重なったレンガの中からもう一匹の蟋蟀を捕えてきて、それもかごの内に入れた。今回は我が友にとっては大したことではなかった。かれはすぐさま羽を動かして鳴きはじめ、新入りもそれに続けて鳴きだした。かれらは互いに弱みを見せず鳴きつづけた。突然、我が友が我慢できなくなりささみのような口を開いた。そして新入りに宣戦布告をしたが、新入りのほうもほんの少しも逃げる様子を見せなかった。

どんな蟋蟀も自分が勝利したと思ったときに高らかに声を上げるが、このことがしばしば敗者を激怒させ、さらに闘争心をかきたてた。そして最後にはこの新入りたちは戦場に倒れるのだが、闘志は最後まで失われないのだ。これで祖父の話が正しかったことが証明されたことになった。それから私は何度か試したが、すべて我が友が勝利した。

十月の中旬、五番目の従妹が我が友の威厳に嫉妬したからであろう、一匹の勇猛果敢な蟋蟀を持って戦いを挑んできた。おそらく十数回は闘ったようだった。ところが我が友はさすがに少し年をとって、気力も萎えているような状況だった。それでとうとう壮烈な最期を迎えたのだ！ これは私にとってはとても辛いできごとだったので、私は彼女を恨みに思った。

我が友の死は惨憺たるもので、太ももが一本噛み切られていた。私は彼の遺体を撤収するときに思わず涙を流した！ そしてかれの魂を慰めるため、特別にマッチ箱をお棺にして遺体を納め、庭のモクセイの木の下に埋めた。そして何本かの菊の花を摘んで墓前に挿した。このようにして私たちの友情は終わりを迎えた。

それ以後、毎年秋になると、私は友と一回つきあい、友を一回埋葬した！

十八歳の秋、私はすでに高校を卒業していた。高校時代には仲の良い友人の文姉さんがいた。彼女は小学校の教員で、私は彼女の学校で用務員をしながら勉強をしていた。家から学費の仕送りを受けると継母が不機嫌になることがわかっていたので、それを避けたかったからだ。家計の実権を握っているのは彼女だった。それで働きながら勉強して大学に行く準備をすることに決めたのだ。このころ私は食堂のごはんを食べていて、小馬虎(シャオマーフー)という名の可愛い少年がごはんを運んでくれていた。彼は貧しい家の子だった。

ある日、彼の破れているポケットの中から私がよく知っている音楽が聞こえてきた。すぐ

に分かった。まちがない、蟋蟀の声だ！ 童心にかえったように、歓喜が押し寄せてきた。私はすぐに見せてくれと彼に言った。やはりそうだ。とても強そうな一匹で、かれは私を見るや元気のよい叫び声を上げはじめた。それで興味がわいてきて、毎晩小馬鹿といっしょに運動場の塀の下に蟋蟀を訪ねることになった。

しかし、かれはいつもよく響く声を聞かせているのに、自分のそばにほんの少しでもだれかの足音が聞こえるとすぐに歌うのをやめ、どこにいるのかわからなくなるのだ。このようにして毎晩、全身ほこりだらけになりながらも何の収穫もなく帰っていった。がっかりしてただぼーっとして壁の下に座りこむのだった。

ある日小馬鹿(シャオマーフー)が昼食を運んできたとき、部屋の中に私の姿がなかったので、料理をテーブルの上に置くとすぐに壁のところに私を探しにやってきた。この時、私は壁の穴を凝視していた。シーシー、シーシーというかすかな歌声が聞こえてきたのだ。小馬鹿を見ると私は喜んでそっと叫んだ。

「小馬鹿、早く来て！ ここよ！」

小馬鹿は嘘嘘草②を一本引き抜いた。(郷里では蟋蟀をその鳴き声をまねて 嘘嘘(シーシー)とも言っていた。嘘嘘草は端をよると白い毛のようなものができ、それを蟋蟀の口のほうに持って行くと蟋蟀が声を上げはじめ、必ず草に噛みついてくる。かれがこの草を好んでいるのか嫌がっているのかはわからないが、だから子供たちはその草を嘘嘘草(蟋蟀草)と命名したのだ。)小馬鹿は抜き足差し足でそっと近づいていき、嘘嘘草を壁の穴の中に入れて揺らした。するとなんと一匹の黒いやつが飛び出してきた。

彼は地面に出るといつものように跳びはねて走っていった。私と小馬鹿もかれのあとを追っていき、運動場の塀をいったい何度行ったり来たりしたことか、だがとうとう小馬鹿がかれを捕まえた。私は嬉しくなって思わず小馬鹿の坊主頭を叩いたので、痛かったのだろう彼は目を見開いて私を見た。このようにして私と小馬鹿は仲の良い友達になった。境遇はほとんど異なっていたが、私達の心の中では友情には何の階級もなかった。

家に帰って蟋蟀を置くと、小馬鹿にいっしょに食事をしようと誘い、感謝とお祝いの意志を示した。小馬鹿も遠慮せず楽しく笑い声をあげていた。私たちの様子を見た文姉さんは、何も言わずにそっと鏡をテーブルの上に置いた。鏡の中に泥で隈取をした二つの顔が出現した。特に鼻の頭には黒いほこりがべったりと付いていた。それを見て私たちはががつと食べていた口を一瞬止め、それから同時に、ワハハハと大声を上げて笑いだした！

祖母から小馬鹿に出会うまでの長い八年間、小馬鹿に会ってから今日までの、同様に長い八年間。

四川では春でも蟋蟀がひと晩中鳴いている。さまざまな音がよく聞こえる静けさの中に、よく知っているあの歌声が聞こえてくると、自然と十六年前の情景、八年前のあの光景が思い出されてきて、泣き笑いをしてしまう！ 十六年前の故郷は、今敵に占領されているのだ！ 八年前の小馬鹿すでにどこに行ったかわからなくなってしまった！

十六年前は私には童心があった。八年前は無邪気さを持っていた。しかしいま、まだ純粹さはあるが、もう童心と無邪気さは私から離れて行ってしまった！

蟋蟀のいるところを訪れ、捕え、闘わせ、埋葬するというのんびりとしたあの楽しみはも

う無くなり、私のために蟋蟀を贈ってくれた人、捕まえてくれた人ももういない。一生のうちには故郷に帰ることもあるだろうし、きっと北方の秋を見ることもあるだろう。だが、慈愛に満ちた祖母にも、可愛かった小馬鹿(シャオマーフー)にも、もう二度と会うことはできないのだ！

今日に至るまで、やはり私は一人でいるのが好きで、仲の良い友人はいない。静寂が好きで騒がしいところは好きではない。私がずっと「勝ち気」で、ずっと「闘志」をもち続けているのは、蟋蟀の性質を自分の手本としているからなのか、それとも祖父の遺訓によるものなのか。

1939年、誕生日前10日、朝 北碚にて
(趙清閣は旧暦1914年5月9日、太陽暦では6月2日の生まれ。)



①北方……長江の北は北方、南は南方と呼ばれている。趙清閣の故郷信陽は河南省南東部に位置し古い歴史を持つ山紫水明の地で「江南北国（江南の北国）」という美称を与えられている。

←②嘘嘘草……蟋蟀草とも。イネ科の一年生草本で、日本ではオヒシバ、チカラグサと呼ばれている。中国には蟋蟀を闘わせる「闘蟋」があり蟋蟀を興奮させるために用いられていた。

原文テキスト：『海上文学百家文庫. 033, 白薇、趙清閣、陸晶清卷』上海文芸出版社，上海市，2012，pp. 502-506.

(中国語原文)

蟋 蟀

北方是可爱的，秋天的气候不冷不热，太阳日光柔和而美；常常徐风吹过，像一只母亲的手，轻轻地抚摩着寂寞底心田！落叶飘散在田野里，大地染上了棕黄的颜色；蟋蟀唱着清脆动听的调子，一切呈现出严肃的景象。这景象始终对于我具有一种特殊的好感，走到任何地方，我都固执地状认为北方的秋天是可爱的。

大概只有九岁吧，那时候开始知道忧郁，孩子群里很少看见我的影子。在学校，总是手不离书，书不离手，从没有欢天喜地和同学们玩耍过。回到家里，亲戚中都是些幸福的儿童，怕看见他们那副老是偎在妈妈身边的娇态。自己常常这样想，没有母亲的孩子，就干脆不要同有母亲的孩子玩，打了架，他们会搬出母亲来向你示威，平时，他们也常有意无意地向你骄傲。像二舅母家的五表妹，她就老是穿一件新衣服或拿一块糖来跟我说：“瞧，我妈妈又给我做新衣服了！”或是“我有好糖果呵，我妈妈买给我的哟！”听了这些刺耳的话，即使你正在高兴的时候，也会不禁淌下泪来！为了这，我没别的办法，只有处处回避他们，自己躺在一边玩；寂寞的日子习惯了，反而觉得群众嘈杂的情绪令人讨厌。（这性格到今日还依旧保持着）

但是有一次我发现了一个好玩伴，它不仅解除了我多少寂寞，还安慰了我悲哀的心情。它不是人，不会说话；然而它会唱歌。它唱的音阶有快有慢，有高有低。在白日，它唱着快而高的调子，好像是要冲破我周遭沉闷的空气，给我以勇敢迈进的激励；在夜间，它唱着慢而低的调子，好像是代替我的母亲，把我催眠到梦乡去。起初，我还保留着这个神秘的感情，不问它的住处和姓名；后来我耐不住了，心里总想见见它的面，这样老隔离着太不够交朋友的道理。于是我下了决心，追踪着歌声的来源，寻觅到窗前菊花圃的石盆下面，我轻轻把石盆搬开，看见一个六分长黑色体的小动物；头上有两根长须，两只炯炯放光的眼睛，尾端又有两根三分长的粗毛；就在这一瞬间，我还来不及和它握手，它只一晃便跳到不知去向了。我怅然失意地愣了半晌说不出话来，终于我“哇”地哭了！惊动了唯一疼爱我的祖母，她诧异地以为我又受了谁的委曲！慈祥她问我：

“哭什么呢？小清！是不是爸爸又给你气受了？乖乖地告诉我，让奶奶去骂他！”

不问则已，一问更觉得伤心了。立刻倒在祖母的怀里痛哭了起来。最后我把以上情形告诉了她，惹的祖母“噗哧”笑出来，她抚着我的头说：

“傻孩子！我当为什么呢，原来为一只蟋蟀呀，它是一种很好强，很有斗志的虫儿；它以泥土为生，捉了来也养不活。从前你爷爷在世时，他也很喜欢玩它，常常捉两只放在竹筐里，让它们斗架；它们谁也不示弱，等到一只斗败了；斗胜的一只便引喉高唱，向败者示威！因此你爷爷有时选择一只最强的来和他朋友养的比赛。他常常教导你的爸爸说：人要学蟋蟀的好强有斗志才行！这句话你也应当记住。玩蟋蟀要好好爱护它，不要伤害它，懂吗？”

用心听完祖母这一段有趣的讲话，忘记了刚才的苦恼，更觉得蟀可爱了，也更殷切她希望捉住它。为了遵从祖父的遗训，似乎必要多和它接近并加以观察和学习。于是我便向祖母问了捉蟋蟀和养蟋蟀的法子。首先我亲手替它做了个笼儿，用刀子把竹筒的一面刻了几条透空气的细格，竹笼的一端挖了个小洞，作为人口。又去买了些银朱，据说用这拌饭喂蟋蟀，它会叫得格外响亮。一切都准备好了之后，我就开始着手去探访它的新所在了。谁知它从此再不歌唱了，整整有两天没有声息。

我又陷入寂寞忧愁的心情中，有时候简直怅惘得懊悔不该徒然惊扰了它！自怨命苦，连个虫儿的朋友都保不住，只落得孤孤独独，凄凄凉凉！

是中秋节的晚上吧，祖母把栗子、核桃、枣等果子分给了爸爸和继母，笑嘻嘻地又拿出一个玻璃盒儿递给我，笑着说：

“快瞧，奶奶送给你一份顶心爱的礼物！”

接过来一看，我乐得如获至宝似的跳了起来；你猜是什么，就是我所朝思暮想的蟋蟀！

我连忙把它装到笼儿里，喂它吃银朱拌。先前它不叫，到了夜间，就引喉高歌。我高兴地尽量待它好，它也渐渐地安居了，于是我们渐渐混熟了。白天把它放在书包内带到学校去，晚上就放在我的枕头旁，让它陪我睡觉。为了这件事，我特别感激我的祖母，感激她无微不至地体恤我，疼爱我。

过了几天，我想试验我朋友的“斗志”了，看看它是不是够资格作我的模范。于是我又到后花园，在砖瓦堆里捉了一只新的蟋蟀，把它也放在我朋友的笼内。这一下不当紧，我那朋友立刻闪动了翅膀叫起来，这新来的一位也跟着叫起来，它们彼此不相示弱地叫着。忽然，我的朋友不能容忍地张开了有两个夹子的嘴，向这位陌生客人宣战了，陌生客人也毫不退缩地逃行抵抗。它们彼此无论谁，凡是遇到胜利时，便拼命地高声唱歌，这样常会激怒了失败者，便更勇敢地斗争起来！

最后,虽然这位陌生客人不堪招架而死于战场,但斗志是始终不懈的。这证明了祖父的话是对的,而且后来,我又照样试验几次,都是这样,也都是我的朋友胜利。直至十月中旬的一天,五表妹为了嫉妒我朋友的威风,她拿了一只极强悍的蟋蟀来讨战;大概交战了十几个回合的样子,究竟我的朋友有些衰老了,在气萎力竭的情况下,终于英勇壮烈的牺牲了!这使我很难过,也因此使我更恨我的五表妹。

我的朋友死得相当惨,一只大腿被敌人咬下来。当我替它收尸的时候,不禁黯然流了泪!为了安慰它的亡魂,我特地把它的遗体用火柴盒作棺材盛殓了,埋在院子里的桂花树下;又采了几朵菊花献在它的坟前,就这样结束了我们的一段友情。

此后,每年的秋天,我都这样交一次朋友,葬一次朋友!

十八岁那年的秋天,我已经在开封读完高中了,这时候我又有了好朋友文姊。她是小学教员,我住在她的学校里候差事。因为不想让家庭供给学费,免得继母不高兴,(经济权是操纵在她手里的。)所以决定半工半读,一面工作,一面准备升大学。这期间我吃饭馆子里的伙食,替我送饭的小马虎,是一个很可爱的穷苦孩子。有一天我发现他的破口袋里传出我所熟悉的音乐,当时就肯定那是蟋蟀的歌声;一种童稚的喜悦袭上我的心头,我立刻向他要来看;果然不错,是一只很健壮的虫儿,它见了我便一鼓劲地狂叫了起来!于是引起我的兴趣,每天晚上,我就同小马虎溜着体育场的墙根去探访蟋蟀。但是常常所见它正叫得响亮时,等你的脚步一经过它身边,便再也没有声息了。这样每天晚上都毫无所获,弄得满身污泥而归。心里怪懊恼的,总是呆呆地坐在墙根下发愣。

有一天小马虎送来了午饭,他看见我不在屋内,把饭肴放在桌上,径直到墙根下找我。这时我正陷瞄准了一个墙洞,倾听着蟋蟀在里面“嘘嘘”“嘘嘘”地低声歌唱;看见了小马虎我高兴地轻轻叫道:

“小马虎,快来!这里有一只!”

小马虎采了根“嘘嘘草”,(在家乡,蟋蟀又名“嘘嘘”,因为它叫的声音是“嘘嘘”。而这种草,可以在一端搓出小白毛,用这白毛去向蟋蟀嘴边拨弄,它会叫起来;说不清它是喜欢这种草呢,还是讨厌这种草;反正它见了草必咬,必叫,所以孩子们就命名它为“嘘嘘草”。)他蹑手蹑足地把草向墙洞里伸进去摇动着,不一会,果然跳出了一只黑黝黝的家伙;在地上它总是蹦着走的,害得我和小马虎跟着它在地上蹦;也不知道沿着体育场蹦了几个来回圈子,才被小马虎的手掌给蒙住了。这一来乐得我禁不住重重地敲了敲小马虎的秃头,疼得他向我瞪了一眼。从此我和小马虎成为好朋友。尽管我们的境遇完全不同,但在我们的心灵里,友谊是没有阶级的。

回到屋里,我把蟋蟀安置起来,然后请小马虎和我同桌吃饭,表示感谢与庆祝的意思。小马虎也不退辞,开心得只管张着嘴笑。这情形给文姊看见了,她一声不响地悄悄拿了一面镜子放在我们的桌子上;里面立刻呈现出两副污泥花脸,特别是鼻子尖上涂满了黑尘土;于是我们正在狼餐虎咽的嘴巴立刻停住了,彼此不约而同地相对“哈哈”大笑起来!

从祖母到小马虎,是一个相当长的八年时间;从小马虎到今日,又是一个同样距离的八年时间。

在四川,春天也有蟋蟀叫,整夜听见万籁寂静中传来熟稔的歌声;这使我会油然回忆起十六年前的情形,八年前的景况;这使我会哭,也会笑!十六年前的故乡,沦陷在铁蹄下了!八年前的的小马虎已不知去向!

十六年前的心,是童稚的,八年前的心还保留着天真!可是今日,今日的心,虽然还依然纯洁如初,但童稚和天真却老远老远地离开了我!

再没有那种闲情逸致去访蟋蟀,捉蟋蟀,斗蟋蟀,葬蟋蟀了;也再没有那为我送蟋蟀,捕蟋蟀的人!这一生即使再回到故乡,再得看见北方的秋天,可是也再不能看见我慈祥的祖母,和可爱的小马虎了!

直至今天,我还是喜欢孤僻,没有好朋友;喜欢清静,不爱嘈杂场合;也还是以蟋蟀的特性为自己的师范;以祖父的遗训,为做人的根本——永远“好强”,永远保持“斗志”?

一九三九年诞辰前十日晨于北碚

□□□□□